

令和元年6月12日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04048

研究課題名(和文) マニラのジェントリフィケーションと貧困地区解体

研究課題名(英文) Gentrification and Displacement in MetroManila

研究代表者

石岡 丈昇 (Ishioka, Tomonori)

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：10515472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フィリピン・マニラで急増する貧困地区解体をジェントリフィケーションの枠組みから分析するものであった。マニラの貧困は、空間的にはスクワッター地区と呼ばれる貧困地域に集積する。近年、スクワッター地区がマニラの経済発展の阻害要因とみなされ、それらの強制撤去が激増している。本研究では、なぜ今日においてスクワッター地区の強制撤去が急増しているのかという構造的条件を、ジェントリフィケーションの枠組みを援用しながら解明した。そして「貧困層のさらなる貧困化」過程が析出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究からは「経済発展によってマニラの都市貧困層の生活が底上げされる」という一般的な主題に対して、それとは逆に「経済発展の過程で新たな困窮が形作られる」点が示されることが、一定程度、示された。たしかに経済発展を通じて、マニラには数々のショッピングモールや高級住宅街が形成され、車道を走る車も外国産の高級車が目につくようになった。だがそれは消費に意欲的な中間層の姿であって、それが全体社会の変化を表しているわけではないことを「貧困層のさらなる貧困化」の事例から捉えることができた。このような観点から、実証的に途上国都市を論じた著作は希有であり、そこに本研究の独創性があると言える。

研究成果の概要(英文)：This study explored the process of forced removal of poor urban communities in Manila, Philippines by the framework of gentrification. Poverty in Manila spatially accumulates in poor urban areas called "squatter area." In recent years, the squatter district has been regarded as an impediment to the economic development of Manila, and their forced removal has dramatically increased. This study elucidated the structural condition of why the forced removal of the squatter district has been increased rapidly today, by using the framework of gentrification. And the condition which produces "the truly disadvantaged" was analysed.

研究分野：社会学

キーワード：マニラ 途上国都市

## 1. 研究開始当初の背景

途上国都市の貧困問題については、従来、過剰都市化と相対的過剰人口の問題として議論が展開されてきた。マニラについても同様の枠組みの下で、重厚な研究が蓄積されてきた(中西 1991、Bernier 1996)。こうした研究は貧困の「政治経済学」の展開に寄与してきたが、一方で貧困が特定の空間に集積すること、すなわち貧困の「空間地政学」については考察が深められてこなかった。ロイック・ヴァカンが「階級 = 空間連鎖 (the nexus of class and space)」(Wacquant 2008: 198)と呼んだこの主題については、政治経済学的議論とは異なった社会学的議論が要請される。近年、世界各国の都市研究でジェントリフィケーション論が盛んになっているのは、この「階級 = 空間連鎖」の解明に、社会学者や地理学者が取り組み始めたためである(Slater 2006、スミス 2014)。本研究は、マニラを事例にこの貧困の「空間地政学」の分析をおこなうものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、貧困の集積するスクオッター地区を事例に、1)スクオッター地区が強制撤去される展開過程を跡づけ、さらに 2)強制撤去を被った世帯のその後の生活変動を解明するものである。これら二点を通じて、マニラの貧困理解を空間論的見地から深めると同時に、先進国(とりわけ英語圏)を中心に論理形成されてきたジェントリフィケーション論を途上国の事例から再考する。

## 3. 研究の方法

申請者はこれまで一貫して、マニラの都市底辺世界とそこでの貧困について社会学研究を進めてきた。本研究計画は、これまでの研究に「空間」という新たなキー概念を加えて、マニラの貧困研究を深化させるものである。このような展開の背後には、マニラで生じている現実がある。それは申請者が長く調査対象としてきた若者の暮らす家屋—スクオッター地区に位置するもの—が、コンドミニアム開発のために 2013 年に強制撤去された出来事である。かれらは生活の本拠を喪失し、よりいっそうの困窮化を余儀なくされた(石岡 2014)。

かれらの強制撤去という個別経験は、今日のマニラの全体動向に深く根ざしたものである。マニラのスクオッター地区の撤去世帯数は 2002 年には 1043 世帯だったのに対し、2011 年はその 14 倍に該当する 14,744 世帯になっている(The Urban Poor Associates のデータ)。2000 年以降、マニラに多国籍企業が増加し、ゲーテッド・コミュニティなども増えた。そうした中で都市空間が中心部から再改造され始め、その過程でスクオッター地区が強制撤去されるようになったのである。

こうしたマニラの現実を踏まえて、申請者はジェントリフィケーション論を踏まえながら、マニラの貧困理解を「空間地政学」の視点から深めることを考案し、本研究計画を実施するに至った。

## 4. 研究成果

本研究の事例地としては、マニラ首都圏ケソン市に位置するスクオッター地区のサンロケを主要調査地として取り上げた。サンロケは 2014 年 1 月に道路に隣接する 250 世帯が強制撤去された地区である。強制撤去された世帯は、市役所の指令によって 4 つの再居住地に送られた。

しかし道路脇から離れたエリアは、その際の強制撤去対象からは外れており、2015 年 10 月の時点でも 3000 世帯以上がこの地区に集住している。しかしこの残存世帯についても、近く強制撤去の実行が確実視されている。

サンロケの事例は、規模の面(数千世帯の大量撤去)でも、脈絡の面でも(背景にあるグローバル企業誘致と空間の社会象徴的改造)マニラのジェントリフィケーションを考える特徴的なものである。本研究からはこのサンロケの事例を中心に、以下の 3 点が明らかになった。

第一に、強制撤去の脈絡が解明された。この撤去は「ケソン市中心ビジネス街建築構想」の中で生じたものである。よって、このビジネス街構想の展開過程を資料分析より明らかにして、強制撤去の脈絡が一定程度解明された。

第二に、撤去を被った人びとの生活変動が解明された。撤去を被った人びとは国家住宅庁の用意した再居住地に送られたが、再居住地周辺は仕事も社会的サービスもなく、生活存続が困難である。よって、その地を離れてサンロケ中心部に舞い戻る人びとも数多い。こうした強制撤去の後の生活変動を「貧困層のさらなる貧困化」過程として解明された。

第三に、撤去を予告されている人びとの生活論理が解明された。現在サンロケに暮らす人びとは、いつ訪れるかわからない強制撤去に怯えながら日常を送っている。この将来の「不確実性」は住民の時間的予見を混乱させるものであり、住民がその混乱とどう対峙しながら、強制撤去を未然に防ごうとしているのかという生活戦略が明らかになった。

これらの結果から浮上したのは、「経済発展によってマニラの都市貧困層の生活が底上げされる」という一般的な主題に対して、それとは逆に「経済発展の過程で新たな困窮が形作られる」という点である。たしかに経済発展を通じて、マニラには数々のショッピングモールや高級住宅街が形成され、車道を走る車も外国産の高級車が目につくようになった。だがそれは消費に意欲的な中間層の姿であって、それが全体社会の変化を表しているわけではないことを、本研

究の「貧困層のさらなる貧困化」の事例から描出することになった。このような観点から、実証的に途上国都市を論じた著作は希有であり、そこに本研究の独創性があると言えるだろう。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

- 石岡丈昇、2018、「エスノグラフィ：耳を傾け書き残す」『現代思想』46-6:pp.42-51. 査読無  
石岡丈昇、2018、「うわさと「疑いの世界」：マニラにおけるインフォーマル居住者の強制撤去と展開過程」『新社会学研究』3:pp.104-124. 査読有  
石岡丈昇、2018、「なぞること／立てること：対象の再構成について」『ソシオロジ』62-3:pp.61-67. 査読無  
石岡丈昇、2017、「癖の社会学」『現代思想』45-6:pp.125-139. 査読無

### 〔学会発表〕(計5件)

- Tomonori Ishioka, 2018, Olympic Infrastructure: Exploring the Materiality of Sporting Mega-events, *2018 World Congress of the International Sociology of Sport Association*, University of Lausanne, Switzerland.  
Tomonori Ishioka, Look, My Baby Got Burned on her Cheek!; Actual use of Tear Gas in Street Struggles, *Contemporary Ethnography across the Disciplines (CEAD) Hui*, University of Santiago, Chile.  
石岡丈昇、2017、「エスノグラフィと時間感覚」第90回日本社会学会大会シンポジウム「社会学の中の質的研究、社会の中の質的研究」東京大学。  
Tomonori Ishioka, 2016, Re-viewing Ethnographic Participation: Towards Ethnography with Time, *Contemporary Ethnography across the Disciplines (CEAD) Hui*, University of Cape Town, South Africa.  
Tomonori Ishioka, 2016, Living with Insecurity, *2016 World Congress of the International Sociology of Sport Association*, Hungarian Academy of Sciences, Budapest.

### 〔図書〕(計2件)

- Tomonori Ishioka, 2018, Training under Uncertainty: Tempography of Underdog Filipino Pugilists, in R.Rinehart (eds.) *Southern Hemisphere Ethnographies of Space, Place, and Time*, Peterlang:pp.197-210.  
石岡丈昇、2016、「スポーツ：ボクシングが切り開く社会象徴的時空」大野拓司・鈴木伸隆・日下渉編『フィリピンを知るための64章』明石書店。

### 〔産業財産権〕

#### ○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

#### ○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

### 〔その他〕

ホームページ等：以下のページに本研究課題の一部をめぐる情報を記載。

<https://www.global.hokudai.ac.jp/blog/spotlight-on-research-boxing-evictions-and-poverty-in-the-philippines/>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。